次号予告

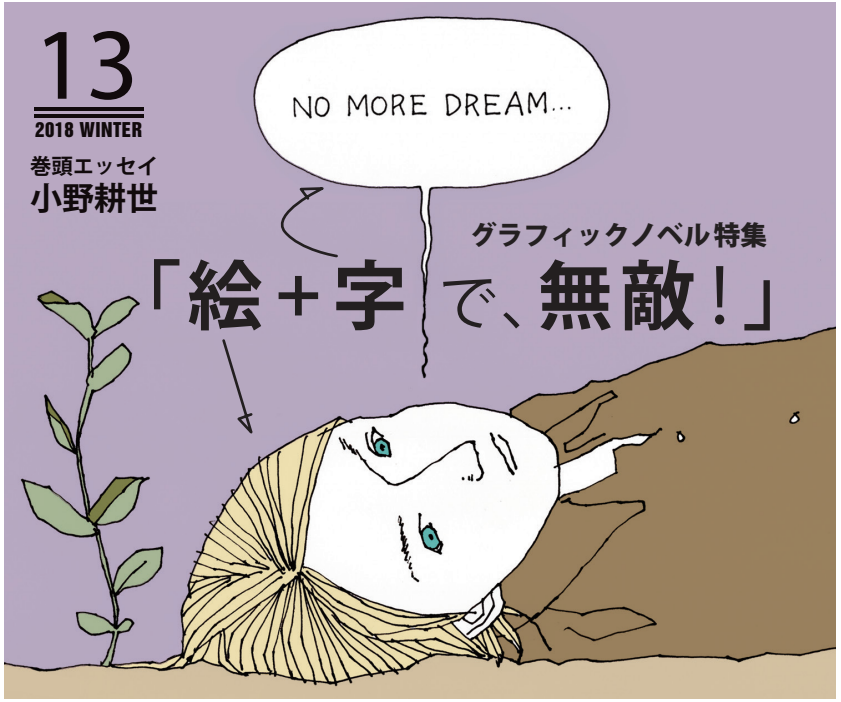
BOOKMARK 14 2019 SUMMER

「against!」

［ブックマーク］
2018年 冬号
Take free

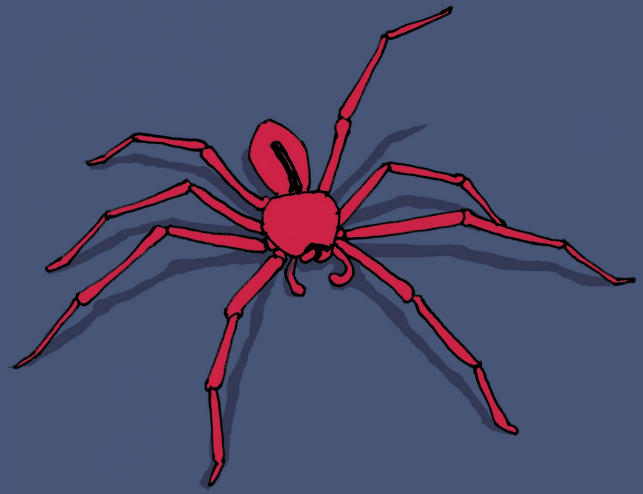
BOOKMARK

FREE BOOKLET［ブックマーク］



BOOKMARK

一般書やヤングアダルト小説だけでなく、児童書もかなり訳しているせいか、図書館などの講演で、「小学校の頃はどんな本を読んでいたんですか」という質問をよく受ける。残念ながら、ぼくの小学校時代は、ほぼマンガとアニメで終わっている。ちょうど、マンガが月刊誌から週刊誌に移行していく時期で、本当におもしろかった。その後、中学生から本も読むようになったものの、古本屋にいくと必ず『ガロ』か『COM』を買って帰った。その後、大学で教えるようになってからも学生とマンガに関する情報交換は頻繁に行っていた。というわけで、とにかく、ここ10年くらいの海外のコミック、グラフィックノベル、バンド・デシネの広がりようが楽しくてしょうがない。そして日本でも次々に紹介されるようになってきたのが、さらにうれしい。ただ、残念なのは、出版されたかと思うとすぐ絶版になることだ。ヴィンシュルスの『ピノキオ』、ホドロフスキー（わが敬愛する映画監督）＆メビウスの『アンカル』、ニコラ・ド・クレシーの『氷河期』、ニール・ゲイマン原作の『サンドマン』のシリーズなどなど。そして、絶版になるといきなり値段が高くなる。日本でもこういったジャンルの本のファンが増えて、いい作品がいつまでも読み継がれることを祈って、今回の特集を組むことにした。（金原瑞人）



Special Guest

「グラフィックノベルの新時代とスタン・リー 95歳の死」

小野耕世

Ono Kosei

「グラフィックノベルの新時代とスタン・リー 95歳の死」

小野耕世

私が翻訳した『マウス』『マウスⅡ』（晶文社）の作者アート・スピーゲルマンとは、1980年代に東京で会って以来の仲だが（その後、来日していない）、『マウス』がアメリカで出たとき、グラフィックノベルとも呼ばれた。「いやあ、コミックスを高級めかした言いかたで、ただのコミックスでいいのさ」とニューヨークで会った彼は笑っていた。すでに1960年代に「グラフィックストーリー・マガジン」というコミックス研究誌がアメリカで出ていて、私は日本のマンガ事情などを寄稿していたことを思い出す。

そしていまや、知的読者層であるおとながコミックスを読むのは全世界的な傾向で、例えばミュージカル化され大成功のアリソン・ベクダルの『ファン・ホーム』（小学館集英社プロダクション）など、すばらしい作品群が翻訳紹介され、グラフィックノベル全盛期の感がある。そんな折、マーベル・コミックスのカリスマ的象徴であるスタン・リーが95歳で亡くなった。1972年にニューヨークで最初に会って以来交流してきた私は、取材を受けあわただしかったが、昨年、彼が1962年に生みだした『スパイダーマン』の最初期約３年分の『マーベルマスターワークス：アメイジング・スパイダーマン』（ヴィレッジブックス）を自分で翻訳しておいて良かったと思う。

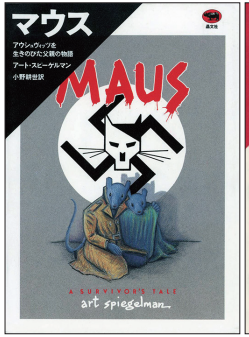
なにしろ約250ページの画面のどこにも（通行人にも）アフリカ系の人たち（黒人）は、描かれていないのだ。つまり、ラルフ・エリスンの小説『見えない人間』（早川書房 1961年）そのまま、彼らは存在しながら無視されているのだが、この翻訳が出た直後に公開された映画『スパイダーマン：ホームカミング』では、ニューヨークのエスニック模様は華やかで、スパイディはアフリカ系の高校の親友の助けを得て大活躍するのだった。私は1970年代から、マーベル・コミックスを五千ページほど訳してきたと思うが、つくづく時代は変わったのだと実感した。

そしていま、ヨーロッパのカラフルなグラフィックノベル群もすばらしい。例えば、フランスのカトリーヌ・ムリスによる『モデルヌ・オランピア』（オルセイ美術館シリーズの第１冊）など、傑作群の翻訳を、私は待ちわびているのである。

［*Maus* I　A Survivor's Tale: My Father Bleeds History］
［*Maus* II　A Survivor's Tale: And Here My Troubles Began］

Art Spiegelman

アウシュヴィッツを
生きのびた父親の物語
『マウス』
『マウスII』
アート・スピーゲルマン
小野耕世 訳
（晶文社）1・2巻 各 ¥2,000＋税



13_01

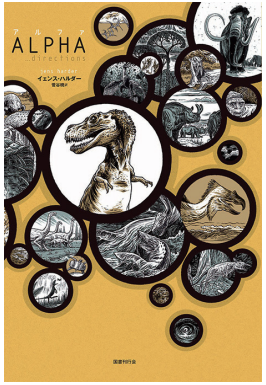
[*Ibicus*]
Pascal Rabaté

『イビクス ネヴゾーロフの数奇な運命』
パスカル・ラバテ
古永真一 訳
（国書刊行会）
¥2,500＋税

アレクセイ・トルストイ原作の小説を、バンドデシネの名手パスカル・ラバテが見事にマンガ化した作品。混迷を深めるロシア革命の時代、ジプシーの女占い師に、自分の出世と引き換えに世界の破滅を宣告された男の数奇な運命を描く。主人公は世の中のどさくさに紛れて一旗揚げようと奮闘しながら、だましだまされ、命からがらペトログラード、モスクワ、ハリコフ、オデッサ、イスタンブールとさまよい続ける。海外のマンガというと日本のマンガに比べて読みづらいイメージがあるかもしれないが、この作品はすこぶる読みやすい。読者を退屈させない物語の展開、個性豊かなキャラクター、モノクロでリズミカルなコマ割り、多すぎないセリフ、巧みで流麗な筆さばき、そこはかとなく漂うユーモア、詩情あふれるイメージ……理由はいくつも挙げられるだろう。とにかく夢幻的と評するほかない世界へとタイムスリップできる。訳すときに原作の小説も読んだが、それよりはるかにおもしろい。文学作品をマンガ化して失敗することは多いが、これは間違いなく成功例である。

（古永真一）

13_02



[*Alpha... directions*]
Jens Harder

『アルファ』
イェンス・ハルダー
菅谷 暁 訳
（国書刊行会）
¥3,700＋税

ビッグバンから人類誕生まで、およそ140億年におよぶ宇宙・地球・生命の歴史を、約2000枚の絵によって描いたのが本書です。誰も見たことのないこれらの太古の光景をできる限りリアルなものにするには、もちろん自然科学の知識に頼らなければなりません。しかしそれと同時に必要なのが想像力です。たとえば恐竜の姿形は化石によってほぼ完全に復元できるとしても、それを「光景」のなかに据えるためには、周囲の植物、地形、さらには「空気感」までも描かなければならないからです。

著者のハルダーも科学的知見は尊重しますが、それ以上の新機軸を導入します。クロマニョン人の洞窟壁画から最新の3D映像まで、あらゆる時代とジャンルの図像表現を太古の光景のなかに並置します。こうしておよそ40億年前の原始海洋と北斎の『神奈川沖浪裏』が重ね合わされ、白亜紀ティラノサウルスのあいだに突如ゴジラが出現します。なんと奇想天外な試みでしょうか。そういえばこの作品は、2010年のアングレーム国際漫画祭で「大胆賞」という面白い名前の賞を受賞しました。

（菅谷　暁）

13_03

[*Killing and Dying*]
Adrian Tomine

『キリング・アンド・ダイング』
エイドリアン・トミネ
長澤あかね 訳
（国書刊行会）
¥3,400＋税

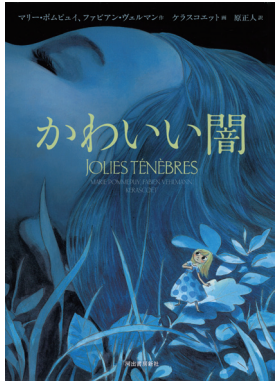
アメリカン・グラフィック・ノヴェルの旗手、エイドリアン・トミネによるオールカラーの短篇集。ニューヨーカー誌の表紙のイラストなど、スタイリッシュな画風で知られるトミネが、６通りのビジュアルと語り口で描く６つの人生の物語だ。

「アート」に目覚めて迷走する植木職人。ポルノ女優にそっくりなせいで災難に遭う女子大生。ＤＶっ気のある麻薬密売人と暮らす女……。どの人物も不器用で、さえなくて、何だか身につまされる。とくに表題作「キリング・アンド・ダイング」の口下手なのにお笑い芸人を目指す少女と抑圧的な父親とのぎこちないやり取りには、読むたびに胸がいっぱいになる。理解し合いたいのにしきれない、もどかしさや愛おしさが紙面にあふれる。

「純文学的」「文芸作品のよう」と評される本書だが、訳者はむしろ「映画のようだ」と感じている。10〜20ページほどの短篇ながら、味わい深い映画を観たあとのような余韻に浸れる。ハッピーエンドではないが、ほのかに希望が灯るようなエンディングに、明日こそいい日にしようと思えるのだ。

（長澤あかね）

13_04



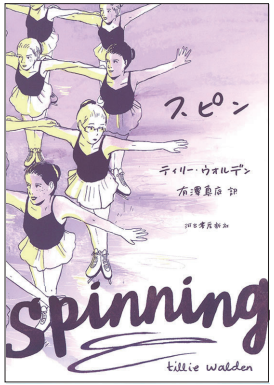
[*Jolies Ténèbres*]
Marie Pommepuy | Fabien Vehlmann
Kerascoët

『かわいい闇』
マリー・ポムピュイ｜ファビアン・ヴェルマン 作
ケラスコエット 画
原 正人 訳
（河出書房新社）
¥2,800＋税

どしゃぶりの雨が降り注ぐ草むらに少女が仰向けに寝そべっている。どうやら彼女は死んでいるらしい。目や口、鼻や耳から小人のような存在がぞろぞろと這い出てくる。少女の死因はなんなのか、小人たちは何者なのか、説明は一切ない。突如として少女の体という居心地のいい住処を追い出された天真爛漫な小人たちは、敵意をむき出しにした大自然の中でサバイバルを強いられる。季節の移ろいとともに朽ちゆく少女の死体のかたわらで、生き残った者たちはなりふり構わず生に執着する。やがて陽気な夏が過ぎ、豊かではあるが物憂げな秋と、ついで死のごとき沈黙が領する冬が訪れる。ただひとり主人公のオロールが皆の幸せのために孤軍奮闘するが、制御不能な自然と仲間たちの身勝手な行動に疲れ果て、やがて彼女は悪意を研ぎ澄ませていく――。バンド・デシネの専売特許といえば繊細なカラーだが、本書の美しい水彩は必見。移ろう季節を背景に、写実的な風景とデフォルメされたキャラが、荘重さと荒唐無稽さが、生と死が融合し、名づけ得ぬ感情に形が与えられていく。

（原 正人）

13_05



[*Spinning*]
Tillie Walden

『スピン』
ティリー・ウォルデン
有澤真庭 訳
（河出書房新社）
¥1,600＋税

テキサスに住むメガネっ娘、ティリーは５歳からずっとスケートに打ちこんできた。その甲斐あって、シングルスケートの選手としてもシンクロスケートの選手としても、毎月行われる地方戦では優勝を狙える実力を持つ。きらびやかな衣装をつけ、気持ちよさそうに滑る美しきスケーターの卵たちは、思春期のまっただ中。リンクの中でも外でも、悩みは尽きない。まして、ゲイだった日には……。

練習と試合に明け暮れるうち、ティリーは自分がスケートを好きなのか、何のために滑っているのか、わからなくなってくる。ひたすらにスピンし続けた足を止めたとき、ティリーの目に映るのは？

グラフィックノベル界のアンファンテリブル、ティリー・ウォルデンのメモワールは絵柄もコマ割りもけれん味がなくてとっつきやすいが、生々しく、胸に迫る（執筆当時21歳）。印象的なのは、空間をたっぷりとるティリーのコマ使いだ。やり場のない気持ちに襲われたとき、ティリーはよく、天を仰ぐ。視線の先の広がりは、スケートリンクの広さ、そしてテキサスの空の広さから来ているという。（有澤真庭）

13_06

[*Ms. Marvel : No Normal*]
G. Willow Wilson
Adrian Alphona

『Ms. マーベル もうフツーじゃないの』
G・ウィロー・ウィルソン 作
エイドリアン・アルフォナ 画
秋友克也 訳
（ヴィレッジブックス）
¥2,200＋税

「ごく普通の若者が突然スーパーパワーを得たら、どうする？」

アメリカン・コミックの世界で何千回と繰り返されてきた問いに、マーベル社が 2014 年に示した回答が「Ms. マーベル」、カマラ・カーンである。ただし彼女の設定は、業界の標準から少し外れていた。白人でも黒人でもヒスパニックでもなく、パキスタン系ムスリムの女子高生だったのだ。

ところが、誌面で描かれるカマラの内面は…本当に、驚くほど「普通」だった。ベーコンを食べられない戒律を嘆き、モスクでの説教中に雑談し、厳しい門限に背いて部屋を抜け出す。おまけにスーパーヒーローおたくで、ゲーマー。ありふれた、善良な俗物である。そんな彼女が、思いがけず肉体変形というパワーを身につけ、人助けのため奮闘する事になる。

善意さえあれば、誰でもヒーローになり得る。その伝統に則っている限り、人種も宗教も決定的な差ではない。かくて心優しいムスリムの少女は、多様性社会の象徴として人々に愛されている。（秋友克也）

13_07

[*Madgermanes*]
Birgit Weyhe

『マッドジャーマンズ ドイツ移民物語』
ビルギット・ヴァイエ
山口侑紀 訳
（花伝社）
¥1,800＋税

冷戦下の東ドイツ。同じ共産主義国であるモザンビーク（南アフリカの右隣）からは、「エリートの教育」という名目で約２万人もの労働者が送り出されていた。実際には使い捨ての期間工として、祖国での内戦の板挟みに遭い、さらには給料の大半が天引きされた彼らは、東西統一後に帰国させられ、自国で「マッドジャーマンズ（＝ドイツ製、の意味）」と呼ばれるようになる――。

母に連れられ、アフリカで育ったドイツ人の著者が、現地やドイツでの多数の聞き取りをもとに、美しい二色でまとめあげた、架空の３人の物語。遠く離れた世界の物語でありながら、読む人に、身近で働く外国人であったり、「故郷とは何か」という問いであったり、登場人物（背後には実は無数の人々が……）たちが悩む愛や家族との関係に対して、多数の問いを投げかける内容となっている。

近年ドイツでは、女性作家のグラフィックノベルが多数刊行されており、『マッドジャーマンズ』は、その中でも評価の高い一冊だ。

（山口侑紀）

13_08

[*La Différence invisible*]
Julie Dachez
Mademoiselle Caroline

『見えない違い 私はアスペルガー』
ジュリー・ダシェ 作
マドモワゼル・カロリーヌ 画
原 正人 訳
（花伝社）
¥2,200＋税

フランス語圏のマンガ“バンド・デシネ”では1990年代から作者が自分の半生を語る自伝や身辺雑記が増え始め、2000年代以降それがすっかり定着。これまでにさまざまな名作が誕生している。2010年代に入ると女性の活躍も目立つようになるが、本書もそうした流れを汲む女性作家による自伝的バンド・デシネ。とはいえ、アスペルガー当事者のジュリー・ダシェが手がけるのは原作のみ。作画は、アスペルガー当事者でこそないが、自身産後鬱を患い、その体験をバンド・デシネにしたこともあるマドモワゼル・カロリーヌが担当している。主人公の27歳のOLマルグリットとは、原作者ジュリー・ダシェの分身に他ならない。生きづらさに耐えながら生きていたある日、マルグリットは自分がアスペルガー症候群だと知る。それ以来、彼女の生活は一変。社会による正常性の押しつけに屈することなく、ようやく自分自身を肯定できるようになる。アスペルガー症候群や広汎性発達障害、自閉症スペクトラムを扱ったマンガは日本にも少なからずあるが、バンド・デシネならではのアプローチが魅力。

（原 正人）

13_09

[*March: Book One*]
[*March: Book Two*]
[*March: Book Three*]

John Lewis｜Andrew Aydin
Nate Powell

『MARCH 1 非暴力の闘い』
『MARCH 2 ワシントン大行進』
『MARCH 3 セルマ 勝利をわれらに』
ジョン・ルイス｜アンドリュー・アイディン 作
ネイト・パウエル 画
押野素子 訳
（岩波書店）
1巻 ¥1,900＋税｜2巻 ¥2,400＋税｜3巻 ¥2,700＋税

50年代から60年代の公民権運動で指導的な役割を担い、現在も政治家として大きな存在感を示すジョン・ルイス下院議員。『MARCH』は、ルイス議員の目を通じて公民権運動を描いた社会派グラフィック・ノベル３部作で、全米図書賞をはじめ数々の賞に輝いた。現在では、ニューヨーク市の公立学校の恒久プログラムにも取り入れられている。

「考えるな、感じろ」とはブルース・リーの有名な台詞だが、『MARCH』は「考えるよりも、感じる」作品だ。漫画とはいえ文字が多いため、細かな歴史的事実などは、あまり頭に残らないかもしれない。しかし、非暴力ながらも断固たる姿勢で、人間の尊厳を求め続けた市井の人々（特に若者たち）の「静かなる勇気」に触れれば、読む者の心は上下に動き、左右に揺さぶられるはずだ。本書を読み終えた時、大人たちは自問するだろう。自分には不正に立ちあがる勇気があるだろうかと。そして、子どもたちは勇気を希望を抱くだろう。絶望せず、歩み続ければ、何だって実現可能なのだと。

（押野素子）

13_10

[*Muchacho*]
Emmanuel Lepage

『ムチャチョ ある少年の革命』
エマニュエル・ルパージュ
大西愛子 訳
（飛鳥新社）
¥2,700＋税

1976年、独裁政権下の中米ニカラグア。上流階級出身の若き修道士ガブリエルは、その絵の才能を見込まれ、片田舎の小さな教会の壁画制作を依頼される。しかし彼の絵は技術が先行し、ひとの心を打つものではない。教会の神父に「ものの表皮をめくる」ように描けと言われ、外に出て村人と触れ合おうとする。そこには温室育ちの彼が知らない世界があった。村人たちは貧困にあえぎ、現政府に不満を持っていた。彼らと触れ合ううちにガブリエルも自分自身と向き合わざるを得なくなり、次第に革命運動に魅せられていく。一言で言えば、少年の成長物語だ。少年から大人への成長、画家としての成長。ストーリーを追って読み終えたら、今度は絵を味わいながら読んで欲しい。ルパージュの才能が存分に発揮されているのがわかるだろう。彼の絵は力強く、繊細で美しく、色彩は鮮やかで構図も大胆だ。なまめかしい身体の絵も魅力だが、むせるような香りまで伝わってくるようなジャングルの絵が気に入っている。ルパージュこそ「ものの表皮をめくる」ように描いているのだ。

（大西愛子）

13 _ 11

[*À la recherche du temps perdu*
Du côté de chez Swann]
Marcel Proust
Stéphane Heuet

『失われた時を求めて──スワン家のほうへ』

マルセル・プルースト 作
ステファヌ・ウエ 画
中条省平 訳
（祥伝社）
¥2,500＋税

『失われた時を求めて』が世界文学史上ベスト級の小説であることは間違いありません。

しかし、異常に長いだけでなく、読み始めればすぐに分かるとおり、文章があまりに緻密すぎて、読みとおすのは至難のわざです。アンドレ・ジッドなど大読書家でも音を上げてきました。

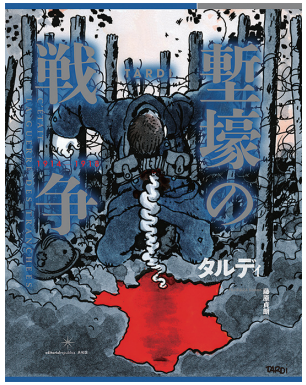
そこでマンガ版の登場です。私が翻訳した『スワン家のほうへ』は、『失われた時を求めて』の第１篇を編集して、約200ページのコミックにしたものです。冒頭から、マドレーヌを食べて幼年期の記憶を一気にすべてとり戻すあの有名な場面まで、なんと15ページ！　これなら誰にでも読めます。

しかし、原作のエッセンスはきちんと保たれています。原文の煩瑣な枝葉は剪定してありますが、すべてプルーストが書いたオリジナルの文章です。要約や書き替えではないのです。

そして私は、気が遠くなるような長い原文を、映画の字幕のように訳そうと心がけました。これで『失われた時を求めて』の第１篇はクリアできるはずです。どうかお試しください。

（中条省平）

13 _ 12



[*C'était la guerre des tranchées*]
Tardi

『塹壕の戦争 1914-1918』

タルディ
藤原貞朗 訳
（共和国）
¥3,300＋税

本書には第一次世界大戦で犬死した一千八百万の無名戦士の魂が、いまだ鎮まることなく蠢いている。かれら名もなき兵士たちは、上官の指示に従って敵弾を浴び「祖国のために」死ぬか、上官に背いて敵前逃亡の咎で「祖国によって」殺されるか二者択一しかなかった。作者はシンプルに訴える。〈御上の美辞麗句に騙されるな！〉、〈上官には従うな！〉、〈自分の頭で考えろ！〉。

タルディはこの戦争を30年描き続ける筋金入りの戦争マニアにして、漫画史上最強の反戦家だ。歴史家ヴェルネとタッグを組み、微に入り細を穿って戦争のリアルを掘り起こし、兵士の無残な死にザマを淡々とグロテスクに描き出した。大戦百周年の年には国家勲章授与候補となるが、「国に丸め込まれるのはまっぴら」と受勲を拒否、忖度なしの反体制を貫いて、漫画家をなめるなよと息巻いた。

古風で直球の政治的な漫画である。線描もコマ割りも古クサイ。だが、忘れてはいけない。かつて漫画は風刺を武器に権力者に喧嘩を挑むメディアだった。本作はその意味で古典的かつ普遍的だ。本国フランスのみならず、ドイツでもあの北米でも大きな賞をすでに得ているゆえんだろう。

（藤原貞朗）

13 _ 13

[*The Walking Dead Volume 1*]
Robert Kirkman
Tony Moore | Cliff Rathburn

『ウォーキング・デッド 1
過ぎ去りし日々【デジタル版】』
ロバート・カークマン 作
トニー・ムーア｜クリフ・ラスバーン 画
風間賢二 訳
（ヴィレッジブックス）
¥950＋税

全米で大人気のTVドラマ・シリーズの原作です。現在シーズン９が放映中で、我が国でもご覧になっている方が多いことと思います。が、原作があることを知らない人もたくさんいるようです。ご存知の方も映像で堪能しているからいいや、なんて思っているかもしれません。もちろん、TVドラマ版は高視聴率を出し続けているのも納得の面白さです。しかし、原作はそれを上回る完成度を誇っています。なにしろ、本国では15年も連載が続いているのですから。

それに原作とTVドラマ版ではストーリー展開はおおむね同じですが、キャラクターの登場・退場、相関関係がかなりちがいます。つまり原作を読み、TVドラマ版を観ることで、〈ゾンビ・アポカリプス〉の荒廃した世界における愛憎渦巻く権力闘争の人間ドラマがより厚みを持ち、立体的に浮かび上がってきます。本シリーズは単なるゾンビもののホラーではありません。主人公たちグループのサバイバルを通して、アメリカ建国神話とヒューマニティの復興を語る壮絶な叙事詩でもあるのです。

（風間賢二）

13 _ 14

[*El bosque de los suicidas*]
El Torres
Gabriel Hernandez

『自殺の森』
エル・トーレス 作
ガブリエル・エルナンデス 画
轟志津香 訳
（河出書房新社）
¥1,800＋税

スペインの奇才コンビが描くホラー漫画。自殺の名所、青木ヶ原樹海を舞台にアランとリョウコ、ふたりのストーリーが展開していく。

元恋人マサミの怨霊に取り憑かれたアランは霊に導かれるように青木ヶ原に迷いこみ、そこで森林監視員のリョウコに救助される。リョウコは監視員として働きながら、樹海で命を落とした父の遺体を捜していた。それは苦労をかけた父への罪滅ぼしでもあった。

アランとリョウコは過去を清算し、新たな一歩を踏み出すことができるのか？

知り合いの日本人から青木ヶ原の話を聞いた著者は、この森を舞台としたホラー漫画を書かずにはいられなかったそうだ。とはいえ異国の地での物語にリアリティーをもたせるのに苦労したようで、日本の風景から怪談、幽霊、神道にいたるまでかなり研究したという。

ホラー漫画でありながら人間の心の闇を見事に描きだした本書は「日本版エクソシスト」とも評され、スペインコミック界の歴史あるHaxtur賞を受賞した。オールカラーの絵はおどろおどろしく魅惑的だ。巻末のエッセイとスケッチもお見逃しなく！（轟志津香）

13_15

[*Vincent*]
Barbara Stok

『ゴッホ ——最後の3年』
バーバラ・ストック
川野夏実 訳
（花伝社）
¥2,000＋税

この作品は、ゴッホの生涯のうち、パリのリヨン駅で弟テオに別れを告げ、アルルへと旅立ったあとの最も濃い最後の３年を描いています。アムステルダム・ゴッホ美術館監修のもと、実際の書簡や絵画に基づいて制作されました。オランダで最も読まれているグラフィックノベルです。

アルルで過ごす間、ゴッホは画家の協同組合を作りたいという大きな希望を掲げ、「ひまわり」「星月夜」「夜のカフェテラス」といった誰もが知る傑作を生み出します。その一方で、度重なる発作によって混乱状態に陥り、それが耳切り事件という悲劇へと繋がっていきます。

作者バーバラ・ストックの持ち味であるシンプルで親しみやすい画風によって、今回、巨匠ゴッホに新たな形で魂が吹き込まれました。ゴッホに関する書籍は数あれど、読者は、これまでになく、ゴッホを身近な存在として感じることができるでしょう。さらに日本語版では、参考にされた書簡の番号や登場した絵画の題名などがコマ下に追加されています。ゴッホに詳しくない方でも、入門書としてきっと楽しんでいただけるはずです。

（川野夏実）

13_16

[*Thoreau at Walden*]
Henry David Thoreau
John Porcellino

『シンプルに暮らそう！
ソロー『森の生活』を漫画で読む』
ヘンリー・デイヴィッド・ソロー 作
ジョン・ポーサリーノ 編/画
金原瑞人 訳
（いそっぷ社）
¥1,600＋税

コミックにするとしたら、『オイディプス王』、『水滸伝』といった活劇ものもいいし、『嵐が丘』、『アンナ・カレーニナ』、『風と共に去りぬ』といった大恋愛ものもいいし、カフカやマルケスの思い切り独創的な短編もいいだろう。だけど、ソローの『森の生活』をコミックにする？　と思うんだけど、これをポーサリーノがやっちゃった。彼の絵ときたら、ありえないくらいシンプルなのに、ありえないくらい表情が豊かで、つい見入ってしまう。あとがきにも書いたんだけど、Part One に出てくる「ずいぶん前のことだが、わたしは猟犬をなくし、赤茶色の馬をなくし、キジバトをなくし、今でも彼らのあとを追っている」という 1 文は、とりとめのないつぶやきのようなもので、それほど印象的ではない。それなのに、彼の絵をみると、そのつぶやきが心に響いて、思わず引きこまれそうになってしまう。そのまま切り抜いて壁に貼っておきたいと思うほどだ。もしこれを読んで面白いと思ったら、この１部が収録されている『大人のためのコミック版世界文学傑作選 上・下』もぜひ！

（金原瑞人）

Pick Up Creator

PEIACO
ペイアコ
http://peiacoijole.wix.com/ehon

BOOKMARK 13
［ブックマーク］ 2018 WINTER

２０１８年12月 発行
印刷：グラフィック

URL：kanehara.jp/bookmark/
Twitter：@bookmarkFB
Facebook：facebook.com/bookmarkfreebooklet/

編集・発行
金原瑞人（法政大学教授・翻訳家）

今回の特集は、いままでの「BOOKMARK」とはまったくジャンルが異なっているため、訳者の方々はみなさん、ほぼ初登場。一般書や児童書とは別の世界だということがよくわかった。ただ、このジャンルの翻訳家の方々や、編集者の方々が、驚くほどいい仕事をなさっていることに、あらためて驚いている。

編集
三辺律子（英米文学翻訳家）

グラフィックノベルとかバンド・デシネとか、ちょっとかっこいい（？）呼び名もあるけれど、要は「マンガ」好きのみなさん、ぜひぜひ手に取ってみてください。好きなマンガベスト10が塗り替えられるかも！

イラスト・ブックデザイン
オザワミカ（イラストレーターとかいろいろ）

わたしのグラフィックノベルとのはじめての出会いは、大定番とも言える「タンタン」シリーズ（エルジェ）。なんて素敵な色づかいなんだろうと衝撃を受けたカラーリングは今でも古びません。

協力
宮坂宏美　田中亜希子　中村久里子